

マネが見た19世紀パリの欲望
—《オペラ座の仮面舞踏会》を中心に—

早稲田大学大学院文学研究科美術史学コース

修士課程2年 中村まの

エドゥアール・マネ (Édouard Manet, 1832-1883) は19世紀フランスを代表する画家である。彼はしばしば大都市パリに生きる人々と彼らの生活を描いた。《オペラ座の仮面舞踏会》もそうした作品に含まれる。本作に関する先行研究は数多く、当時謝肉祭の時期にオペラ座で毎年開催された仮面舞踏会で不徳な関係を求めた男女を表している作品と考えられてきた。それでも、絵画史の文脈に沿って本作を検討した研究は十分になされているとは言い難い。本発表では、一次資料と同主題作品の比較検討を通して、画家が本作にこの主題を通して同時代人のどのような姿を捉え、表したのかを再考する。

謝肉祭の時期にはパリ中で仮面舞踏会が開かれたが、最も歴史が古く人気を博したのがオペラ座の仮面舞踏会である。参加者は仮装をし、踊りに明け暮れ、そこで出会った異性と一夜の恋を楽しんだ。19世紀前半から、画家たちはオペラ座の大広間で踊り騒ぐ群衆や、会場のあちこちで繰り広げられた人間模様を丁寧に記録してきた。この主題を扱ったのはもっぱら、大衆的メディアであった版画だった。宗教画や歴史画を重んじる油彩画の世界では好まれず、扱われたとしても、別の題材を取り入れる口実に利用したり、教訓画へと改変したりすることで、主題の持つ通俗的、享乐的側面を否定した。

マネの作品では、作品の舞台は大広間ではなく回廊であり、そこは売春や不貞の恋を求めて男女たちが集まった場所として知られていた。本作はそこに集った燕尾服を着た男性と、多様な格好をした女性たちが恋の駆け引きをしている様子を表しており、同場面を表した版画作品と人物の様子、構図が共に類似している。つまり、マネは主題の性格を否定せず、仮面舞踏会時の回廊で不道德な行いをする同時代人たちを描いたのだ。

そうした同時代人たちを強調するのが、画面上部に見られる女性の足のみの描写と指摘されてきた。19世紀、女性の足は男性の性的欲望を掻き立てるものと認識されていた。当時の版画は、男性が女性の足に注ぐ性的視線を、画面の枠やモチーフの重なりを利用して足のみをトリミングする方法で諷刺した。《オペラ座の仮面舞踏会》も女性たちの足のみを描くことで、女性の肉体が男性の性的対象物であることがフェミニズム的観点から解釈されてきた。加えて本発表で主張したいのは、女性も積極的にその立場を楽しんだということである。つまり、本作は高尚な主題が重んじられる油彩画でありながら、オペラ座の仮面舞踏会に映し出された同時代人の欲望に満ちた姿を真摯に表現した作品と考えられるだろう。